

河童と杜
ある晩夏の篠山
白い花

増田昌和
短編小説集

河童と杜

泥深きかつて田庭と呼ばれた国の山奥に、何やら奇骨な生き物が棲んでおるといふ噂があった。頭禿にして体軀は黄蘗、樹の枝葉に擬態するや触れば水となり川を揺蕩い、時に枯葉に紛れ、稀に禿げた頭皮を隠しそびれて人に気付かれ、踏まれるやいなや人を喰うという話まで流れておった。奥田庭のある邑から、山一つ超えて海へ出づるには杜を越え清流を越え闇を越える寂れた一本の道しかなく、殊に夜、稀に山奥から聞こえる「ホホー、ホッホッホッ」という割れた法螺貝の掠れ音のような気味悪い声が聞こえるや、翌日邑人の一人が必ず霧消していることから、人はこの道のある杜を「三途の杜」と呼んでおった。もともと、流れていたのは噂だけで、誰もその生き物を見たことがなかった。この前若い女が消えたときに邑長(むらおさ)が若い衆に尋ねたところ、至極当然の答えが返ってきた。「見たものは皆喰われるから、誰も見たことがないのは当たり前じゃ。」

白髪の方がまだ皺のなき肌をしていた頃、王家の一族がこの道を通られるということで噂を聞き、時の政府が杜を切り開くよう邑の工人集団に命じたが、古い檜の大樹を切るや皆足の病にかかって歩けなくなつたことから、当時の邑長が都に向いて説明しこの道だけはお避け頂くよう申し出たところ、時の皇が邑長に言った。「それならお前が歩いてみよ。帰つてこなければ通らぬ」と。その後、邑長は山へ消え、再び見た者はいない。今はこの邑からこの道を通ろうとする者はなく、来る者はいても行く者はいない。猛々しくも意気揚々の若人(わこうど)はおらがこそと嘲笑をもつて山に向かうが戻る者はなく、それゆえ邑には年寄りか瘦小の若人しかいなかった。

ある夜、お蜜という、丈がまだ大人の半分くらいの子(こ)が、「河童を見た」と邑の衆に言った。周囲の大人は怯えつつ聞いた。「でまかせを言うんじゃないよ。どこに見たって言うんだい？」お蜜は言った。「この前の秋、拾ったどんぐりを植えていたの。この春に芽

が出たんだけど、その若葉を今日の夕方眺めると、その葉っぱの一枚が河童になって光のように空に消えていったんだよ。杜の方に向かって。「何を言っているんだい？」 邑の衆は信じがたげな眼差しで女子を見つめた。大人が言えば、邑八分である。母が静止しようとしたが、少女は最後にこう続けた。「夜になってもういちどそつちを見ると、何も変わらなかつたけど、月明かりだけはいつもより強かつたんだよ。」 その同じ夜、邑人は再び「ホホー、ホッホッホッ…」という気持ち悪い声を聞いたが、次の朝、消えた邑人はいなくなつた。

よく知られていることだが、椎のどんぐりは生で食べる。ある時、海の邑の若者由宇(ゆう)がこの山の道を通つてきた。土産に山の奥でとれたという椎のどんぐりを持つてきた。聞けば山の谷間に小川が流れており、それを越えれば、樹冠に隙間なく地に光の届かぬ深邃の場所、鬱蒼とした瞑い杜が汎がつており、方向も何も分からないという。困つて仕方なく地面を触れば何やら丸いものがたくさん落ちてゐる。それを集めてさっきの小川に戻つて見るやどんぐりだつた。ふと気付けば道は杜ではなく小川に沿つて続いており、半日歩いてこの邑に着いた、という話である。面白がつてこれを聞いていた若い連中二、三人がそれを食うたところ、翌朝当人達は足が細くなり眼が攣りあがり、頭から樹の葉が生え真ん中は禿げ上がつていた。家族の数人がそれを見た以外誰も証言はなく、やがて「ホッホッホ」と宣(のたま)いながら山に走り去つたそうである。

帰る前夜、邑人は皆由宇に言つた。「山から帰るのはよしなはれ。ひと月余分にかかるが、南から回つて京に出た方がよい。おぬしいい人柄じゃ。死なせたくなはない。」と。由宇は言つた。「妻が病に倒れており、生死の境を彷徨つてゐる。何とか薬を求めてここに来た。探しているものは見つからなかつたが、このどんぐりを食べて河童になつたのを聞いた。どうせ死ぬのなら、この不思議な木の実を妻に食わせたい。その時は私も一緒に食うつもりだ。」とにかく急ぎだ、南から迂回する余裕はない。」と。

その晩、由宇が眠っていた時、横で動くものを感じた。うつすらと眼を開くと、女子がこちらを見ていた。「お兄、ここで一緒に眠ってもいい？」お蜜だった。「いいよ、どうしたんだい？」由宇は尋ねた。「私ね、怖い夢を見たの。見たこともない着物を着た人が、どんぐりの木を切り倒して、河童がね、数百、数千とうようよ彷徨ってるの。たくさんいるんだけど、皆痩せ細ってね、骨がないみたいで、そのうち泥の川に吸い込まれて皆消えていったの。後にはね、木の切り株がたくさんあって、強い光が差し込んでいて、眩しくて、何も見えなかったの。後のことは分からない。目が覚めて、怖くて怖くて、それでね……」お蜜の眼からは涙が流れていた。「悪い夢を見たんだよ。さあ、もう寝よう。」由宇はお蜜の髪を撫でながら言った。「お兄、明日帰るんやね……」

翌朝早く、由宇が眼を覚ました時には、お蜜はもういなかった。邑長に最後の別れを告げ、多くの者がまだ眠っている中、一人山に消えていった。往路歩いた小川を進むと、やはり左手に、どんぐりを拾った深い闇の杜があった。由宇は、その奥で煙のようなものを見た気がした。手元に残っているどんぐりはもう三つしかない。もう少し拾おうと思い、意を決して再び、鬱蒼と茂った淫色の瞑い杜に入った。

暫く歩くと、真っ暗で何も見えなくなった。鬱蒼とした杜の空気は生ぬるく湿っており、ふと触った樹の肌はぬめぬめとし、驚いて倒れた地面は深い腐植土でぶよんと沈んだ。気持ち悪くなって戻ろうとしたが、遠くのかすかな明かりだけが手がかりで、一目散に走ろうとしたがすぐに樹の幹にぶち当たり、また光が見えなくなる。やがて恐怖から眼もまともに見えなくなり、記憶も飛びながら光を探し懸命に進もうとした。

「ホッホッホッ、ホー」薄気味悪く杜を貫く震えた声が辺りに響いた。「ホホッ、ホッホッ」もう一度、同じような声が聞こえた。生温(な

まぬるい風が由宇の顔を舐め回した。「なんだ。」初めて由宇は、大声を出したが、ざわざわとした音に掻き消された。気が付くと上の方で強い風が吹いており、樹冠の隙間から時折どんよりと曇った空が垣間見えた。やがて風が止み再び闇が戻ったときには、由宇は腰から崩れ落ち、もうじつとして動かなかった。

「お兄ちゃん」ふと、近くから聞き覚えのある声が聞こえた。「お蜜ちゃん？」闇に向かって聞き返した。「うん。お兄ちゃん、どんぐり、食べる？」優しくそうな声が返ってきた。「帰りたいんだけど、道が分からないんだ。」由宇は答えた。「お兄ちゃん、どんぐり、食べる？」また同じ声が聞こえた。「妻が病気でね、早く帰りたいんだ。お兄ちゃんじゃなくて、お兄ちゃんのお嫁さんに、どんぐりを食べさせたいんだ。」俯きながら、もう周りを見ず、由宇は答えた。その時、由宇は口元に何かを感じた。どんぐりだった。「食べる？」闇から声が聞こえた。「お兄ちゃんじゃなくて……」由宇がそう言った時には、どんぐりは口の中に入っていた。甘く苦い味を感じたまま、由宇は気を失った。

気が付いたときには、由宇は山の向こう側の入り口に倒れていた。もう自分の邑は目の前である。何も考えず、妻のいる家に向かった。帰り着いたときには、妻は既に元気になっていた。「昨日、河童の夢を見てね、河童がどんぐりをくれたのね。そうして眼が覚めたら、昨日まで動けなかったのに、全然治っていたの。不思議な夢だったわ。」こう妻は言った。由宇は、ふと気付いた。「どんな河童だったんだい？」妻は答えた。「小さな、かわいらしい女の子の河童でね、そうそう、名前を『お蜜』って言ってたっけ。小さなどんぐりをくれてね、甘くて苦い、おいしいどんぐりだったわ。」

それ以来、由宇はこの山を越えたことはない。もう齢（よわい）も五十を超えるが、夫婦円満に過ごしている。やがて生まれた娘には「お

蜜」という名をつけたと聞く。

「冬も葉の落ちぬ深い杜は、今も由宇の家から遠くに見えるが、あれ以来一度も足を踏み入れたことがない。河童の話は、邑人の間でも時々流れるそうである。」

ある晩夏の篠山

昨日までいたおじいちゃんが、今日は、もういない。

雄一が眼を開いたときには、もう、太陽は空の真ん中に昇っていた。夏の終わりの風が、破れかけた障子紙をばたばたと鳴らしていた。木造平屋住宅で、畳の向こうは庭だったが、石積みと地面の境には、所々、刈り残しの草が背丈ほどになり、黄色い花を咲かせていた。

家には、誰もいなかった。14歳の雄一にとつて、この静けさは初めてだった。太陽に熱された石が風に負けるのは、ここ数日のことである。畳の上には、何もなかった。お膳も、隅にきちんと片付けられていた。太陽の光は、通路までで、畳の上までは届いていなかった。

雄一が知っているのは、数日前から家族が神戸に行っていること、そして昨日聞いた、祖父が昨夜亡くなったこと、そして、今夜は近くの親戚の家に泊まることだった。

いつの間にか、染みた寝汗が乾いてきていた。はっと、喉が渴いていることに気がついた。水道からコップに水を汲み取り、一気に飲み干した。そのまま冷蔵庫から昨晩の残り物を取り出し、朝食をとった。1時間近くかけて、ゆっくり食べた。さっきの寝起きの10数分の経験が、不思議なことに、今の1時間よりもはるかに長く感じられた。

さっきの部屋に戻り、ふと、庭の塀の向こうに、いつものように、篠山城跡が見えることに気がついた。よく、おじいちゃんと歩き、遊んだ場所である。歩いて20〜30分くらいのところだが、祖父の前を歩き、後ろを歩きして、一緒に楽しんだ。

雄一は、家を出て、ひとり、城跡に向かって歩き出した。いつの間にか、太陽の日差しが強くなり、まだ季節は夏であることを感じさせた。やがて階段を登ったそこは、篠山城跡の広場だった。

「雄一、これ、カマキリや。大きいやろ。」

「へえ、よう見るけど、怖いんちゃうん。」

「こつかんだら怖ないがな。ほら、持ってみ。」

おそろおそろ持ったら、案の定、挟まれた。

「痛っ。こいつ、はさみよるやん。」

「当たり前や、そやからカマキリゆうんや。」

といて、すぐに指からカマキリをとつてくれた。指の先には、小さな血の点が並んでいた。

「痛ったあ。おじいちゃん、なんでそんなすぐ、カマキリはずせるん？」

「ははは。たいしたことちゃうがな。この背中の細いとこ無理に強くつかんでみ、嫌がっておじいちゃんの指の方を攻撃してきよるがな。せやからはなしよるんや。」

「へえ…」

少し眼は充血していて、怖い気持ちものこっていたが、実は、わくわくしていた。他にも、カエルやバッタ、セミなどを一緒にとった。何をやっても雄一は負けたが、競走だけは、祖父にいつも勝った。

「おじいちゃん、すごいなあ。何でも知ってるなあ。」

「はは。昔の知恵や。おじいちゃんは、もうちよつと山奥のところで育ったんやけど、お前の親父らと違って野原育ちやさかい。蜂の幼虫も食うたし、線路つかつたいたずらもしたし…。」

気がついたときには、堀の上から篠山の街並みを眺めていた。遠くに多紀連山が見え、青空と雲の間に鳶が飛んでいた。標高の高く空気のきれいな篠山は、太陽が強く、痛いくらいだ。

また、祖父のことを思い出した。この辺りの年寄りには農家が多く、きつい農作業をしている老人たちは皆、背中が丸く曲がっていたが、まっすぐ椅子に座って仕事をしていた祖父だけは、いつも、背筋もまっすぐしていた。ときどき、雄一の頬にあごを押し付けて動かし、雄一をこしよばがらせた。白髪の顎髭でも、ざらざらしていて、変な気持ちの悪さが楽しかった。

時々聞いた、戦争の話も面白かった。戦闘機が飛んできて、川に飛び込んで、もぐってじっとしていたそうである。やがて、戦争が終わり、長男以外はこの家も、大阪や神戸、あるいは名古屋屋に行き行った。祖父も同じように、阪神間で、雄一の父が大きくなるまで生活していた。

汗びっしょりで、ちよつとぼうつとしてるのに気がついた。雄一は、そのまま家に帰ることにした。城の下の広場には、車が数台止まっている以外、何もなかった。10日ほど前、ひとりで出かけたデカンショ祭りを思い出した。賑やかだったが、留守番をしていた雄一にとっては、その賑わいが気持ちに入ってこなかった。花火を見て、一人静かに家に帰ったのを思い出した。

家に帰った雄一は、昨夜のことを、今日初めて、思い出した。電話で、おじいちゃんが亡くなったという連絡を聞いた。それから、親戚が来て、今日は泊まりにおいで、と言われた。それを断って、晩御飯だけもらって、布団の中に潜っていた。ずっと泣いて、泣きつかれて眠ったのだった。

庭を見たら、さっきまでいた篠山城跡が遠くに見えた。白かった。雄一には、それが、単に遠いから白いのだとは思えなかった。しばらく静かに外を眺めていたが、電話一本、鳴らなかった。静かな、晩夏の昼だった。足の長いバツタが、庭をひよつ、と飛んでいた。

「…神戸に、行こう。」

雄一は、そのまま、駅に向かって家を出た。

白
い
花

いつのことかははっきり覚えていませんが、ある初冬の広い野原の真ん中に、一輪の小さな白い花が咲いていました。この季節、他に咲く花もなく、一面の緑の中に輝く紅の花弁であれば、その耀きをあたり一面に発散できたでしょうが、もう伽羅色に覆われ水気を失った朽ち葉の中に紛れ、しかも地面のすぐ上に咲いていたものですから、そのすぐ上を幾枚もの枯葉に覆われ、誰もその存在に気付くことはありませんでした。

その花が咲いた最初の頃には、近くに何匹かの蟻が通り過ぎることがありました。初秋のような陽気に満ち溢れ、生暖かい風が辺りを吹きぬけ、時折差し込む太陽の光線は、その一つひとつがとても強いもので、その花びらの白さを一層引き立てるものでした。そのころはまだ、たとえそこが誰の目にもつかないような寂しい所だとはいえ、その花にとってはとても気持ちがよく、時には自分の花びらの輝きに見とれるくらいの余裕が、まだあったのでした。けれども、やはりその存在には、誰も気付いてくれませんでした。

ある日、一匹の蝶が飛んできました。

「こんにちは。」

その白い花は、こう言いました。

「こんにちは。いい天気ですね。」

その蝶は、それだけ言って、静かに蜜を吸っていました。やがて、何も言わずに、そのまま飛び去ってしまいました。

2, 3日が過ぎた頃、急に木枯らしが吹き始めました。気が付いたら、もう蟻一匹すら通ることはなく、辺りの草の葉も急に朽ちはじめ、乾いた冷たい空気が地面の土までひからびさせようとしているのでした。

ある日、その花が咲いてから初めての雨は、小さな嵐の夜でした。何とか耐えようと、身をこわばらせながら、必死になって地面にくっついて、朝の光を待っていました。その白い花は、まったくの闇の中、自分の身に感じる激しい痛みと、切り裂くような大きな音だけが感じられたのでした。

いつのまにか、朝が訪れていました。嵐の後の、透き通った天色の空高くには、一羽の尾の長い鳥がゆっくりと横切っていました。静かでした。冷たく冷えた柔らかな空気が、斜めから差し込む薄亜麻色の光と相まって、枯れた葉の上に残った露に、そよかな虹を映していました。

その花は初めてそのとき、自分の白い花びらが泥で汚れ、所々がちぎれているのに気付きました。

「どうしよう・・・」

辺りの空気の冷たさが、もう季節が本当になんか変わってしまったことを、その花に告げていました。同じように、自分の花としての命も、もう終わりだということ、その花は悟ったのでした。

次の日の朝、初めて霜が降りました。そのときには、その花の花びらは、もう全て地面の上に落ちて、小さく縮んでしまっていました。

「なにも、なくなっちゃった・・・」

その花は、いや、むかし花だった茎のかげからは、急に悲しくなりました。なんで自分はこんな時に生まれてきてしまったのだろう、と思うと、耐えきれなくなり、けれども、もう辺りには生き物の姿はひとつも見られず、本当にひとりだけになってしまったことを、今はっきりと悟ったのでした。

野原の真ん中の、枯れた草に覆われた土の上で、その茎は、ひとり静かに泣いているのでした。

数日が過ぎました。その日は、風の強い日でした。空には所々に雲が見えましたが、少しぼうつとしていたら、もうその雲はどこかに行ってしまうようで、太陽の光もあちらこちらで、遮られたと思ったたら射してくるといった様子でした。

ふと、近くの空に、ふらふらと舞っているものを、その茎は見つけました。行方定まらず、風に流されるかのように落ちたりふわっと浮いたりしながら、やがてその茎の上に止まりました。

「こんにちは」

その茎にこう声を掛けたものは、ぼろぼろになってはいましたが、間違いなくあの時の蝶でした。

「こんにちは」

その茎は答えました。

「また、お会いしましたね。」

時おり吹き抜ける小さな風にも、今にも飛ばされそうな感じでしたが、なんとなく顔だけには笑みを浮かべて、その蝶は言いました。

「ごめんなさい・・・」

その茎は言いました。

「もう、こんな・・・」

少し察したのか、その蝶が言いました。

「寒くなりましたね。」

「ええ・・・」

辺りの風は、やや弱くなっているようでした。時おり太陽の光が、その茎と蝶のところにも届きました。少しの沈黙が、流れました。

いつの間にか、その蝶は、眼を閉じていました。まるで眠っているような様子でした。

「どうしたんですか・・・」

「・・・・・・・・」

気がつくと、その蝶のぼろぼろの羽は、もう動きを止めていました。

「・・・・・・・・」

はつと、その茎は気付きました。そして、一度だけ、その蝶に尋ねてみました。

「どうして、ここが、わたしたと、分ったんですか・・・」

その時、その蝶が少し微笑んだように見えました。その瞬間、蝶はぼとりと、真下へ落ちてしまいました。その茎が地面を見下ろした時には、そこにはただ、一匹のみすぼらしい蝶の死骸が横たわっているだけでした。けれども、その顔には、何か微笑みのようなものが、静かに浮かんでいるような感じがしました。

その年の冬は、いつもより寒い冬でした。3ヶ月もの間、地面の上から雪が消えることはありませんでした。

ようやく訪れた次の春、もうそこには、あの蝶の姿も、あの茎の姿もありませんでした。ただ、ちょうどその花の咲いていたところには、一輪の小さな赤い花が、同じように地面のすぐ上で、かよらかな花弁を花開かせていました。

この春も、同じように、たくさん蝶が辺りを舞い、色とりどりの花々があたり一面に咲き乱れていました。暖かい風が辺りを舞い、太陽の柔らかな光がその空気を包み込んでいました。

ある日、一匹の蝶が飛んできました。

「こんにちは。」

その赤い花は、こう言いました。

「こんにちは。いい天気ですね。」

その蝶は、それだけ言って、静かに蜜を吸っていました。やがて、何も言わずに、そのまま飛び去ってしまいました。

またすぐに、別の蝶が飛んできました。

「こんにちは。」

その赤い花は、また、こう言いました。

「こんにちは。」

その蝶は、こう答えながら、ずっと蜜を吸い続け、やがて、何も言わずに、そのまま飛び去ってしまいました。

暖かい春の季節も、花の寿命を変えることはできませんでした。やはり、半月が経った頃には、もうその花の花びらは地面に落ちてしま
い、みすばらしい茎だけがそこに残されていました。

「ああ・・・」

悲しくなって、そのかつて赤い花だった一本の茎は、泣きたくて泣きたくて仕方のない気持ちに襲われました。けれども、その周りには、今にも青春を謳歌している色とりどりの花々が、ここぞとばかりに咲き誇り、体面もあってか、めそめそ泣くなんてことは、決してできませんでした。

やがて、一匹の青虫が、その茎をよじ登り始めました。

「どうしたんですか」

その茎は尋ねました。

「ちょっと、お借りします。」

それだけ言って、その茎は、そこに蛹を作りました。やがてその蛹からは蝶が出てきて、ひと言、ありがとう、とだけ言って、どこかへ飛び立っていきました。

一月ほど経って、その茎も自分の命の最期を終えようとしていたとき、ふと、一匹のみすぼらしい蝶が、行方定まらず、風に流されるかのようにふらふらと舞いながら、やがてその茎の上に止まりました。

「こんにちは」

その茎にこう声を掛けたものは、ぼろぼろになってはいましたが、間違いなくあの時の蝶でした。

「こんにちは」

その茎は答えました。

「また、お会いしましたね。」

時おり吹き抜ける小さな風にも、今にも飛ばされそうな感じでしたが、なんとなく顔だけには笑みを浮かべて、その蝶は言いました。

しばらく、互いに何も話ませんでした。辺りの風は、やや弱くなっているようで、時おり太陽の光が、その茎と蝶のところにも届きました。

いつの間にか、その蝶は、眼を閉じていました。まるで眠っているような様子でした。

「どうしたんですか・・・」

「・・・・・・・・・・」

気がつくとき、その蝶のぼろぼろの羽は、もう動きを止めていました。

「・・・・・・・・・・」

そのとき、ふと、その茎は思いました。そして、一度だけ、その蝶に尋ねてみました。

「どうして、ここに、戻ってきたんですか・・・」

その時、その蝶が少し微笑んだように見えました。その瞬間、蝶はぼとりと、真下へ落ちてしまいました。その茎が地面を見下ろした時

には、そこにはただ、一匹のみすぼらしい蝶の死骸が横たわっているだけでした。けれども、その顔には、確かに、微笑みが、はっきりと浮かんでいました。それを見た茎は、そのまま、腐りかけていた根もとから、ぼとりと横に倒れてしまいました。

いつのまにか、その茎の、むかし花びらがあつた辺りには、小さな涙が、静かに浮かんでいました。

河童と杜

この小説は、私の勤務する『NPO法人たんばぐみ』にて毎年秋に実施している『河童ダービー』にヒントを得て執筆したものです。『河童ダービー』は、河童一匹あたり五百円を頂き、例年篠山市本郷(西紀地区)の友渕川にてレースを行い、頂いた金額を『丹波環境基金』に寄付するものです。(平成一七年度は、篠山市今田町の「篠山市サギソウ保存会」に助成されました。)

この小説では、椎の木、檜の木が登場します。この木は、丹波地域の潜在植生たる常緑広葉樹林の高木層を構成する代表的な樹種です。いわゆる「丹波」と呼ばれる地域は、ほぼ全域が暖温帯に位置し、約二百年間人の手が加わらなければ、椎の木、檜の木、その他ヤブツバキ、アオキ、サカキ、ヒサカキなどの常緑広葉樹に覆われます。これが意味していることは、「自然」であり、動植物の在り様を尊重し、それに手を加えない、即ち「無為」という、もつとも簡単でありながら実際には難しい、人間の態度の結果のことです。この「自然」即ち「杜」に対し、河童を重ね合わせたのがこの小説なのです。

日本の植生、特に樹木に焦点を当てると、概ね次の三種に分けることができます。それは、①木材生産のためのスギ・ヒノキなどの針葉樹林、②里における生活上の必要性から生じる雑木林、③潜在植生のあらわれた、その土地条件や気候にもつとも適応した樹種により構成される林です。分かりやすく言うと、①は生業、②は文化、③は自然です。

丹波では、①は青垣町など、林業生産の盛んな地域に多く見られます。丹波産の木材を使った古民家再生などに活用され、地域文化の保存・継承に大きな役割を果たしています。

②は、「丹波の森宣言」に代表される、丹波地域の里づくり活動の一環として見られるものであり、昔からの「里山文化」の結果として生じたものです。具体的には、常緑広葉樹林を切り開けば、植生遷移が退行し、数十年間はクスギ・コナラ・アベマキなどの落葉広葉樹が卓越します。この落葉広葉樹林も、放っておけば常緑広葉樹林に遷移しますが、意図的に間伐することで、落葉広葉樹林が維持されます。こ

ここで重要なのが、意図的に間伐する理由です。それは、間伐材を、椎茸のほだ木にしたり、薪にしたりすることで、生活に利用することで。また、落葉広葉樹は秋にいつせいに落葉しますが、その葉を、農作業の終わった季節に田んぼに鋤き込んで、次の年へ向けた土づくりを利用するのです。このように、落葉広葉樹林は人間の生活文化と密接に結びついたものであり、また里づくり活動を支援・推奨する「丹波の森宣言」と一体となって推進されるべき、私たちの大切な文化遺産でもあります。

なお、現在丹波地域でしばしば見られる落葉広葉樹林は、その多くがあくまでスギ・ヒノキ林が放置された結果の遷移途上のものであり、即ち放置林のそれであり、いわゆる里山林としての雑木林ではありません。また、子どもたちに里山の大切さを伝え、その保全のために落葉広葉樹を植えることは非常に重要なことですが、その際に子どもたちに伝えるべきことは、単に大きく育てて満足するために植えるのではなく、将来「切るために」植えるということです。里山林は生活と結びついたものであり、即ち「文化」であり、「自然」ではないのです。

③は、兵庫県の丹波地域では通常、常緑広葉樹林であり、もう少し標高の高いところ、例えば氷ノ山(養父市)の標高千メートルを超えるところでは、ブナなどの落葉広葉樹林になります。この意味するところは、「自然」であり、即ち、「自ずから然り」「あるがまま」のことで

人類は道具を発明し火を使い、身の回りの環境を支配・征服することで文明を生み出し現代の快適な生活を築いてきたわけですが、その弊害が、「環境破壊」という形で目に見えてきています。これを克服する方法として様々な科学技術が生み出され、人類の将来への明るい展望も見えはじめていますが、依然として地球温暖化などの問題は深刻化する一方です。ここで、最も簡単なことをもう一度見直すことで、解決の糸口が見えてくるという思いから、この小説を書きました。即ち、「自ずから然り」つまり「動植物の本来の在り様を尊重し、必要以上に手を加えないこと」の大切さを見直そう、ということなのです。

何も手を加えないということは、最も簡単そうに見えて、実は最も難しいことです。例えば、田んぼの畦道に草が生えるのは、当たり前前のことです。けれども、それを「見栄えが悪い」と言って、刈り取ります。また、マツなどは本来尾根筋など一部の場所にしか生えない特

殊な樹種です。けれども、松茸が欲しいから、とか、見た目がきれいだから、という理由で、多くの場所に植えます。夏に暑いのは当たり前ですが、涼しい方が快適だということでクーラーを入れます。全て、人間の利便性のために、何らかの「行為」をしているのです。

現代社会の様々な問題が、このような「行為」を通して「驕り」に起因するとすれば、それを克服する方法は、「自然」の大切さ、「在るがままの姿」を尊重することにあると思います。「行為」もよい方面に向けば素晴らしい効果を生み出します。科学技術の発展はまさにそれです。けれども、車の窓からゴミを投げ捨てる、お茶碗にご飯をたくさん残しても「もったいない」と思わない、安いからと言って何度も使えるものを使い捨てにする、快適なゴルフ場にするために大量の農薬を撒布するなど、誤った方面に向けば、やがて人間は自らの首を絞めることとなります。その解決への糸口が、「自然」であり、「杜」なのです。

椎の木や榿の木から構成される常緑広葉樹林は、鬱蒼としており、陰気で薄暗く気味が悪いです。地面に届く光も一年中少なく、どこに何が潜んでいるのかが分かりにくい。椎の木や榿の木が豊富な堅果を実らせるといことは、ここには熊や猪などの危険な動物が徘徊しているということでもあります。即ち、本当の「自然」とは、「生命」に関わるような「怖く」「恐ろしい」場所であり、ハイキングをして楽しむような場所ではないのです。この「自然」即ち「杜」の奥深さ、恐怖感、そして神秘性を子どもたちに伝えることが、私たち人類の将来への道筋となるのです。

最後に、この小説を書くことになったきっかけは、河童ダービーを今後どうするかでたんばぐみ一同が迷い悩んでいたときに、理事長である坂東隆弘氏が、「河童の面白い話を書いてみたらどうか」と私に持ちかけて下さった一言でした。氏は長編小説を意図していらっしやいましたが、拙い私の文章力ではこの程度の小説で精一杯でした。改めて坂東氏に御礼申し上げるとともに、この小説をお読み頂き、一人でも多くの方が、丹波の環境について考えるきっかけになれば、この上なく幸いに思います。

ある晩夏の篠山

篠山の夏の終わりに、ある少年が短い時間に感じた、人生という長い時間の記録です。

白い花

心の繋がりへの記録です。私が書いた短編小説の中で、もっとも大切なものがこの『白い花』です。

増田昌和

1979年11月生まれ。

主著：『可能性についての探究』（2006年3月）

現在、NPO法人たんばぐみ事務局主任 兼 丹波食文化発信機構事務局長
篠山市在住

『可能性についての探究』は哲学の知覚論の書籍であり、篠山市立中央図書館、丹波市立図書館その他全国の大学図書館・公立図書館に蔵書しております。

『河童と杜』『ある晩夏の篠山』『白い花』：短編小説集

著者・発行者：増田昌和

協賛：NPO法人たんばぐみ

2007年4月15日発行

Copyright © Masakazu Masuda 2002-2006. All Rights Reserved.

《この小説は、著作権法により保護されています。著作権者に無断で一部もしくは全部を複製・転載することは、法律で認められた場合を除き、著作権侵害となり処罰の対象となります。》

定価：無料

※ 頒布は無料ですが、少しでも丹波地域の環境保全に興味をもたれた方は、『丹波環境基金』へのご寄付をお願いいたします。

(1口：500円)

詳しくは、NPO法人たんばぐみ 増田 まで
丹波市柏原町柏原 173 TEL：0795-73-1171